ナラバ何レニ請求スルモ可ナリト解スベキデアラウ。債務者ハ常ニ取消ノ訴ノ被告トハナラヌノデアツテ、第三債務者ニ對スル債務免除ノ如キ債務者ノ單独行為ヲ取消スニモ受益者タル第三債務者ヲ被告トスベキデアル。而シテ債務者自身ハ取消ノ訴ノ判決ニ依ツテ何等ノ請求ヲ爲シ得ベキデナイノデアツテ、ソレガ却ツテ制度ノ目的ニ適スル。利益ヲ返還セシメラレタ受益者又ハ転得者ト、其ノ前主タル債務者又ハ受益者トノ関係ハ賣主担保責任（五六一條以下五九九條）ニ依ツテ大体解決サレ得ルト思フ。尚ホ転得者ト謂フガ故ニ包括承継人ノ善意ハ問題ニナラヌ。

（註）債権者取消権ハ債権者保護ノ趣旨ニ出デタル制度デハアルガ、之ト同時ニ第三者ノ利益ノ保護ヲ計ルコトモ忘却スベキデナイ。若シ債務者ノ詐害行為アリタル場合ニ第三者ガ善意ナルト悪意ナルトヲ問ハヌシテ、総テ之ヲ取消シ得ルモノトセンカ善意ナル第三者ハ常ニ不測ノ損失ヲ被リ、延イテ取引ノ安全ヲ害スルニ至ル。故ニ第四二四條一項但書ハ詐害行為ノ相手方タル受益者又ハ転得者ガ其ノ行為又ハ転得ノ當時債権者ヲ害スベキ事実ヲ知ラザリシトキハ債権者ハ善意ノ之等ノ者ニ対シテ取消権ヲ行使シ得ザルモノトシタ。茲ニ受益者トハ債務者ノ行為ニ依ル直接ノ相手方ヲ謂フ。而シテ法文上詐害行為アルタルコト更ニ利益ヲ取得シタル者ヲ謂フ。而シテ法文上詐害行為アルコトハ取消権ヲ行使セントスル債権者ニ於テ立証スルコトヲ要スルモ実際上多クノ場合四囲ノ事情ヨリ「債権者ヲ害スベキ」意思ハ推測シ得ラレル。之ニ対シテ受益者又ハ転得者ガ債権者ヲ害スベキコトヲ知レリトノ挙証責任ハ法文上債権者側ニナイノデアツテ、受益者又ハ転得者ガ返還請求権ヲ免レントセバ自ラ其ノ善意ナルコトヲ立証スルコトガ必要デアル。

次ニ問題ハ受益者ノ悪意ト転得者ノ悪意トノ関係ニシテ、債務者ノ財産ガ受益者ヲ経テ転得者ノ手ニ帰シタル場合ニ、債権者ニ於テ取消権ヲ行使セントスルニハ両者共ニ詐害ノ事実ヲ知ルコト、即チ双方共ニ悪意ナルコトヲ要スルカ、或ハ何レカノ一方ガ悪意ナル場合ニハ尚取消権ヲ

行使シ得ルカハ明文上明カデナイガ故ニ学説ガ岐レテヰル。例ヘバ債務者受益者ノ詐害行為ニ依ル財産ヲ転得者ガ取得シタル場合、転得者善意ナラバ最早取消権ヲ行使シ得ズトスル説ガアル。又債務者転得者共ニ悪意デモ受益者ニシテ善意ナラバ斯ル場合ニモ取消シ得ズトスル説モアル。然シ債権者取消権ノ制度ノ趣旨ヨリスレバ債務者悪意ニシテ且ツ受益者、転得者ノ中何レカ一方ガ悪意ナラバ此ノ取消権ヲ行使シ得ルト思フ。故ニ転得者善意ナル場合ニハ其ノ目的物ノ返還ハ請求シ得ズトモ、之ニ代ルベキ債額ノ償還ナサシムルコトニ依リ債権担保ヲ充実スルノ目的ヲ達シ得ル。

大正九年五月二十九日大判

判旨「民法四二四條ノ詐害行為取消ノ訴ニ於テ債務者受益者共ニ悪意ナルモ転得ガ其ノ転得ノ当時善意ナルトキハ、債権者ハ債務者ト受益者間ノ法律行為ヲ取消サシメ、其ノ結果転得者ニ対シテ直接財産ノ回復ヲ求ムルハ不可能ナルヲ以テ之ニ代ヘテ受益者ヲシテ損害

ヲ賠償セシメ得ルニ止マル。又債務者、受益者、転得者共ニ悪意ナルトキハ債務者ノ任意ニ右法律行為ヲ取消サシムル結果転得者ニ対シテ直接財産ノ回復ヲ求メ得ベク、又受益者ニ対シテ財産ノ回復ニ代ヘテ損害ヲ賠償セシメ得ルモノトスし。

大正六年十月三日大判

判旨「債権ヲ詐害スベキ法律行為ガ転得者アル場合ニ於テ、受益者ト転得者トノ間ノ法律行為ヲ存立セシムルモ債権者ノ利害ニ影響ヲ及ボサザルトキハ之ヲ取消スノ必要ナキモノトス。受益者ガ債務者ヨリ譲受ケタル不動産上ニ他人ノ為メニ抵当権ヲ設定シタル場合ニ於テ、其ノ抵当権ヲ存立セシムルモ債権者ノ取消ノ目的ヲ達スルコトヲ得ルトキハ、債権者ハ転得者タル抵当権者ニ対シ抵当権設定ノ取消ヲ請求セザルモ、受益者ニ対シテ右不動産ノ譲渡行為ノ取消ヲ請求シ得ルモノトス」。トシテ

詐害行為ノ取消権ハ債権者ニ対スル関係ニ於テ相対的ノモノニシテ

受益者ト債務者間ニハ尚ホ其ノ効力存続シ、従ツテ受益ノ設定シタル抵当権ハ当然消滅セズ。抵当権附ノマヽ不動産ヲ返還セシメ得ルトシテヰル。斯クテ現在ノ判例ハ受益者又ハ転得者ノ中何レカ一方ガ悪意ナラバ其ノ悪意ノ第三者ニ対シテハ取消権ヲ行使シ得ルモノトシテヰル。債務免除ノ場合ニ於テモ債務者ヲ被告トスルノ必要ナク受益者ガ悪意ナラバ之ヲ被告トシ、債権者ハ其ノ免除行為ヲ否認スルコトニ依リテ受益者ヲシテ債務免除ノ利益ヲ主張シ得ザルモノトスルヲ以テ足ルノデアル。此ノ場合ノ訴ハ形成権デアル。

次ニ取消権ノ行使ニ依リ利益ヲ返還セシメラレタルトキ、其ノ者ト其ノ前主トノ間ヲ如何ニ解決スベキカノ問題ガアル。此ノ点ニ関シテハ法文上何等ノ規定ハナイガ、賣主ノ担保責任ニ関スル規定ノ準用ニ依リ解決シ得ルト思フ。無償行為ノ場合ニハ問題ハナイガ、有償行為ノ場合ニ付イテ問題デアリ、五五九條ニ依リ賣買ニ於ケル賣主ノ担保責任ニ関スル五六一條以下ヲ準用シテ解決スベキデアル。本條ニ転得者トハ特定承継人ヲ指シ、相続人ノ如キ一般承継人ヲ含マナイ。

取消権ノ行使ノ効果トシテ債務者ノ資力ハ回復シ其ノ担保力ハ増加スルモ債務者ハ訴訟ノ当事者デナク、従ツテ債務者自ラガ受益者又ハ転得者ニ対シテ財産ノ請求権ヲ有スルモノデハナイ。

大正八年四月十一日大判

判旨「詐害行為取消ノ効力ハ相対的ニシテ其ノ裁判ハ独リ訴訟当事者タル債権者ト受益者又ハ転得者トノ間ニ於テノミ法律行為ヲ無効ナラシムルニ止マリ、訴訟ニ干与セザル債務者ニ対シテハ法律行為ハ依然トシテ有効ニ存在スルモノナレバ、取消ノ効果タル原状回復モ亦債権者ノ受益者又ハ転得者ニ対スル関係ニ於テノミ発生シ、債務者ハ之ニ因リ何等直接ニ権利ヲ取得スルモノニ非ズ。故ニ債務者ハ詐害行為ノ取消ニ依リ受益者又ハ転得者ニ対シテ直接ニ財産ノ回復又ハ之ニ代ルベキ損害ノ請求権ヲ取得スルモノニ非ズ」。

大正十年六月十八日（一〇一）大判モ同趣旨ニテ

判旨「詐害行為取消訴権ナルモノハ債権者ヲ害スルコトヲ知リテ為シタル債務者ノ或律行為ヲ取消シ、債務者ノ財産上ノ地位ヲ其ノ法律行為ヲ為シタル以前ノ原状ニ復シ、以テ其ノ債権者ヲシテ其ノ債権ノ正当ナル弁済ヲ得セシメ、其ノ一般担保権ヲ確保スルヲ目的トスルモノニシテ、而モ其ノ取消ノ効力ハ総債権者ノ利益ノ為メニ生ズルモノナルニ依リ、取消権者ハ詐害行為取消ノ効果トシテ受益者又ハ転得者ノ受ケタル利益又ハ財産ヲ自己独リ辨済ヲ受クル為メニ之ガ請求ヲ為スコトヲ得ザルハ勿論ナレドモ、他ノ債権者ト共ニ弁済ヲ受クルガ為メニ受益者又ハ転得者ニ対シ其ノ受ケタル利益又ハ財産ヲ自己ニ直接支拂又ハ引渡ヲ為スコトヲ請求シ得ルモノト謂ハザルベカラズ」ト見テサル。

斯クシテ債務者ニ復帰シタ利益又ハ財産ハ総債権者ノ共同担保トシテ債務者ノ資力ヲ構成スルモノデアツテ、独リ取消権ヲ行使シタ債権者ノミガ優先的ニ辨済ヲ受ケ得ルノデハナイ。之レ民法四二五條ガ「取消ハ総債権者ノ利益ノ為メニ其ノ効力ヲ生ズ」トスル所以デアル。但シ其ノ債権者ガ取消権行使ノ為メニ費シタ費用ハ共益費用トシテ先取特権（三〇七條）ノ保護ヲ受ケ得ル。

(十)、債権者取消権ニハ特別ノ短期消滅時効ガ設ケラレタ（四二六條）。

（註）取消ナル制度ハ或ル法律関係ヲ中途半端ナ状態ニ置クモノナレバ関係者ニ取リテハ一種ノ不安定ナル地位ニ置カレテサルモノト謂ハネバナラヌ。故ニ法ハ短期時効ヲ設ケテ成ル可ク此ノ不安ナル地位ノ安定ヲ計ラシメテサル。民法四二四條ニ「債権者ガ取消ノ原因ヲ覚知シタルトキ」トアルハ、債権者ニ於テ債務者ガ債権者ヲ害スルコトヲ知リテ行為ヲ為シタルコトヲ覚知シタルトキト解スベキモノトス。

大正四年十二月十日大判ハ判旨「民法四二六條ニ規定セル二年ノ時効ノ起算点タル取消ノ原因ヲ

覺知シタルトキトハ、債務者ノ法律行爲ガ詐害ノ目的ニ出デタルコトヲ債權者ガ覺知シタル時ヲ謂フモノニシテ、受益者ニ對スルト轉得者ニ對スルトニ依リ起算点ヲ異ニスルモノニ非ズ」。

大正六年三月三十一日大判ハ、

判旨「債權者ハ賣買ノ事実ヲ知ルモ詐害ノ事実ヲ知ルニ非ザレバ、取消ノ原因ヲ覺知シタルモノニ非ズ」。トシテ

鉱業權ノ賣買ニ於テモ賣買契約成立ト同時ニ鉱業權ヲ移轉スベキ債權的効力ヲ生ジ、其ノ登録ニ依リテ行爲ノ効力ガ初メテ発生スルモノデナイカラ、詐害行爲ハ契約成立ト同時ニ発生シ、取消權モ此ノ時ニ成立スルトシタ。

大正十四年一月二十八日（四）大判ハ

詐害行爲取消權ニ付キ目的物ニ對スル假処分ガ時効中断ノ事由トナルカガ問題トナツタ。大審院ハ取消權ノ返還請求ノ目的物ニ付キ変更ヲ生ジ、判決ノ執行ヲ不能若クハ困難ナラシムル虞アル場合ニ於テ其ノ保全ノ爲メ假処分ヲ爲スコトハ時効中断ノ効力アリト見テヰル。

（債權總論上巻終リ）

池F67

編輯兼發行者　加藤帝大學生出版部

發行所　東京市四谷區仲町三丁目十八番地

印刷所　神田區仲猿樂町二十番地　吉澤元光社